

風船爆弾

言葉の國

白鳥省吾

畑に胡瓜が生り、枇杷が黄に熟してゐる。今日此の頃は、やはり終戦直前の思ひ出が湧く。葛山に駐屯してゐる兵隊さんがやつて来て、「枇杷を食べさせてくれませんか。」と言ふので、「どうぞ勝手に樹にのぼつて食べて下さい。」と答つたり、本營の方に來て驚嘆しながら苆を打つてゐる兵隊さんに馬鈴薯をふかしてやつたり、兵隊さんが口給自足するのだと隣の畑に胡瓜やトマトを作るので、手にする竹を賣ひに來たりした。そうしてゐるうちに艦載機が頻りに來るやうになり、九十九里沿岸は本土上陸の決戦地だといふので、全村疎開の問題が起き、やがて急轉直下の終戦となつた。

隣の空母に近い防空壕に全家八人首をひそめて、戦報の解説を待つてゐたその頃は今は直軍や軍竹が束ひ束ひ落ちて見ればなぐ壊れてゐる。

六月二日のニューローク・タイムズを見たと「フットノット、ラウ ヒストリー」といふ題で、

「一九四四年から一九四五年まで、日本は亞米利加に向つて爆弾を發射した紙輕氣球を九千個も送り、少くも一千個は亞米利加、加拿大、アラスカ、メキシコに届いた。日本はてふど亞米利加が森林の火災期である一九四四年四月にその輕氣球を送ることをやめた。おそらく、日本の參謀本部では、風船爆弾が一向効果が無いので經費が無駄だと思つたからだらう、まさしく、それらの爆彈輕氣球によつて僅か五人の死者があつた。」と、記してゐる。この風船爆弾は私の住んでゐる此の九十九里の海岸から打上げられてゐて、「あ、奇麗だ。」とよく、子供等と屋に出て眺めたものだ。

九千個の風船爆弾で五人の死者！このナンセンスは相當なもので、レーズベットの急死まで、あの風船爆弾のせいにしたことがあつた。このニューローク・タイムズを讀んで感ぜられることは、僅か十二頁のなかにさつしりと正しく「世界」を反映してゐる豊富さがあることだ。日本には斯う